

日高山脈の自然環境をどのように次世代に引き継ぐのか Part2

幌尻山荘排泄物人力運搬を通して

高橋 健（日高山脈ファンクラブ事務局長）

■ ボランティアによる山小屋【幌尻山荘】排泄物人力運搬は2014年で終了

当会の幌尻山荘排泄物人力運搬は2005年から2014年までの10年間で、延356名のボランティアの協力により、約4226kgもの排泄物を担ぎ下ろした。しかし当会が幌尻山荘排泄物人力運搬を続けていくことはボランティア運搬を固定化させる、山岳環境保全の対価を受益者に負担してもらう方法が検討されないことに繋がることから、10年目の区切りとなる2014年をもって当会主催の幌尻山荘排泄物人力運搬事業は終了する決断をした。山のトイレを考える会の愛甲哲也事務局長によれば、北海道内で人力だけによる排泄物運搬が経常的に行われてきたのは幌尻岳だけだったそうだ。

■ 2015年からは平取町役場主催で山小屋【幌尻山荘】排泄物人力運搬実施

当会主催による排泄物人力運搬終了表明後、幌尻山荘を所有する平取町役場が主催し、平取町山岳会、日高山脈ファンクラブが協力して、幌尻山荘排泄物人力運搬事業を継続して実施している。平取町役場が主催実施することにより、地元住民の参加者が増え、地元の問題であるという認識が深まったように感じている。

■ 2016年の幌尻山荘排泄物人力運搬事業に参加

平取町役場が主催して2年目となる2016年の排泄物運搬事業は9月22日（祝・木）に、私を含め参加者19人で実施され、214kgの排泄物を運搬した。最大量を運搬したのは、びらとり農協職員で2缶＝25.5kgであった。

2016年は雨天によるシャトルバス運行中止により登山者が例年より少なかったことから年1回の、この事業で貯留槽の排泄物はおおむねすべて下界へ運搬することが出来た。



貯留式トイレからの排泄物の汲み取り作業



背負い子等に担いでの排泄物担ぎ下ろし姿

■シーズン途中のバイオトイレ故障

2016年は、雨天のために登山者が少なく、大きな問題とならなかったが、シーズン途中でバイオトイレが故障し、そのままメンテナンスが行われないうちに、シーズンが終了してしまったことが2017年シーズンに影響を及ぼさないか心配している。

幌尻山荘に限らず、山岳地のバイオトイレがキッチンと稼動しているところは非常に少ないと思われる。その要因としては、温度や日照時間などの厳しい気象条件にあること、小型水力や風力、太陽光など電源が安定しないことがあると感じている。

設置箇所によって条件が変わるため、設置主体・施工業者・バイオトイレメーカーは設置したら終わりではなく、設置後、少なくとも10年程度は実証実験期間として、三者が綿密な情報共有と真摯な対応を行うことが、望まれているように感じてならない。

2008年に、幌尻山荘において行った研究者（森 武昭氏（環境省環境技術実証モデル事業検討会山岳トイレし尿処理技術ワーキンググループ座長・神奈川工科大学電気電子工学科教授）、上 幸雄氏（日本トイレ研究所長・技術士（環境部門））、船水 尚行氏（北海道大学大学院工学研究科環境創生工学専攻サニテーション工学研究室教授）、愛甲 哲也氏（北海道大学大学院農学研究科准教授、山のトイレを考える会事務局長 いずれも肩書きは当時）・北海道庁日高振興局国定公園担当者・平取町役場担当者・平取町山岳会員・山荘管理人・日本山岳会員・当会事務局及び会員が参加した現地フォーラムでも、電力、トイレ建築、し尿処理などに関し一元的に把握し、調整するコンサル的な機能を果たす組織の設置を検討するとしており、早急な組織設置、改善が望まれる。

■理解されない受益者負担

幌尻山荘は、もともと、管理人の居ない無人避難小屋として林野庁が設置した。その後、平取町役場に管理が移管され、管理人配置、小型水力発電設備設置、バイオトイレ設置、屋外水道設備設置、緊急対応用衛星携帯電話設置、管理人による日々の清掃、予約制導入による混雑の回避など、無人小屋だった時代とは比べ物にならないほど利用環境は改善している。改善に伴い、使用料は当初の500円が1,000円に、現在は1,500円になっている。

幌尻山荘で利用者は、対岸の湧水を水源とする沢から引いた水道で煮炊きをし、夜は、薪ストーブで体を温め、小型水力発電による電灯の下、語らい、バイオトイレで快適な排便をしている。そしてバイオトイレ以外の貯留式トイレで排泄した排泄物は、ボランティアが運搬している。にも関わらず、今でも、無人小屋であったときと同じような意識での利用、避難小屋だから無料にすべき、という意見が少なからずある。

それはガイドマップの執筆に関わるようなガイドからも、そのような意見があり、有料だから幌尻山荘は利用せず、キャンプ指定地になっていない七つ沼カール（国定公園特別保護地区）で違法キャンプをするツアーが横行していることを悲しく思う。

10年以上前から私は、問題解決のためには受益者負担、山荘利用料の値上げしかないという持論を持っている。現在の1,500円を1,000円もしくは1,500円値上げすることに

より、排泄物運搬用のヘリコプター代（約300万円）を捻出することが出来る。年1回のヘリコプター運航が可能になれば、現在は、管理人や山岳会員が人力運搬している山荘やバイオトイレ補修資材を往路で運搬し、復路で排泄物を運搬出来る。

しかし、ツアー事業者だけでなく、平取町役場や地元業者のなかにも、利用料値上げへの反対論が根強い。その理由の一つに新冠ルートへ登山者、ツアーが流れている？ことがある。道外の登山ガイドさんは、「新冠ルートは沢歩きがないことがメリットと選ぶツアーが最近増えてきたことは確かです。しかし、最終ゲートからポロシリ山荘の間は長時間の歩きがあること。最終集落から先からは危急時連絡の手段が確保されないこと。幌尻沢に右岸から合流する支沢2か所の悪天時の渡渉の危険性など。額平ルートに比べ必ずしも安全とも言えません。このまま新冠ルートに登山者が増えると、事故の増大、ここでもトイレの問題が出てくると思われます。」と言っている。

ヌカビラルートでは、当会が設置された17年前から山岳環境保全、登山環境の改善に取り組んできており、先進地としてボランティアに頼ること無い、改善に取り組まれるよう要望する。

■求められる北海道庁の真剣な取り組みと連携調整機能

幌尻岳ヌカビラルートでは10年以上かけて、当会と多くのボランティアと林野庁・平取町役場との連携により山岳環境の改善を図ってきた。山岳環境を改善、維持するために利用調整も取り入れていただいた。

幌尻山荘を含む幌尻岳一帯は日高山脈襟裳国定公園に指定されている。国定公園の管理者は都道府県なので、幌尻岳一帯の公園管理者は北海道庁になるが、当会結成以来、北海道庁が真剣になって幌尻岳一帯の公園管理をしてきたとは到底思えない。

2005年2月に北海道庁の出先機関である日高支庁（現在は日高振興局）に送付した提言書【「幌尻岳」の山岳環境保全と持続可能な利用方法について】に明記した「日高山脈襟裳国定公園の稜線付近では幕営が登山者の判断に任せられている」点について、2014年に、北海道庁日高振興局日高山脈襟裳国定公園担当者に確認したところ、「日高山脈稜線には幕営指定地がないのだから幕営は出来ない。幕営はされていないものと認識している」との回答だった。

果たして現状はどうなのか？・・・稜線上やカール内には、幕営のため土地が開削され、高山植物帯が裸地化し、カール内においてはハイマツを切った焚き火跡が散見されている。現状を見ずして問題は無いと言い切る態度が悲しい。パンフレットに、天上の楽園【七つ沼カール】にキャンプと、堂々と書いている登山ツアーも散見される。

登山者個人、登山愛好団体が山岳環境の保全のために活動していくことは必要だが、一人・一団体それだけでは山岳環境の保全を図っていくことは難しい。やはり日高山脈襟裳国定公園の山岳環境をどのようにしていきたいのか、と言う点を、国定公園管理者である北海道庁が率先して関係機関、団体、登山者を巻き込み協議をして実践をしていく、そ

うしなければ山岳環境を次世代に引き継ぐことは出来ない、当会結成後17年間の活動を通して、そう感じている。

■目先の経済効果・登山者の利便性よりも優先されるべき山岳環境の保全

当会では2003年当時、閉校予定であった平取町立豊糠小中学校を登山教育施設とされるよう、平取町役場・平取町山岳会に提言していたが、単なる簡易宿泊施設「とよぬか山荘」、シャトルバス乗り場となってしまったのは残念である。簡易宿泊施設が出来たのは、当会調査によって夏季に一体程度の登山者がいることが把握され、その登山者の前後泊の需要があると見込めたからだ。現在の「とよぬか山荘」には、幌尻岳等自然環境を持続可能な形で利用する、清掃や排泄物人力運搬に協力すると言った姿勢が見受けられない。

しかし経済優先で良いのか・・・日高山脈の魅力は、世界自然遺産にも匹敵し得る日本最後の山岳秘境と言われる自然環境、沢登りを主とする整備されていないルート、豊かな動植物とのふれあい、登山者が少なく静かな登山が楽しめること、などを求めているのであって、日本アルプスのような便利なものを登山者が求めているとは思いたくない・・・。

幌尻岳ヌカピラルートにおいても、ヌカピラ川沿いに尾根道を開削しようという動きが地元にある。増水によって登山が制限され、シャトルバスのお客が確保できないという営利的理由によるものだ。現在の渡渉ルートの草刈りもままならない状況で、新たに尾根ルートを開削するとすれば、誰が維持管理するのか？ということも未解決である。

持続可能な保全と利用を検討せずに、目の前の利便性を追求するというのではなく、世界自然遺産に匹敵する優位性を日高山脈の山岳環境が持ち続けていること、標識もない登山道も整備されていない原始の山岳環境を求めて登山者が入山していること、原始の山岳環境を保全し、持続可能な利用方法を検討し実践していくことなど、日高山脈の持つ山岳環境を次世代に引き継いでいくことこそが現世代に課せられた責務であると思っている。

日高山脈の山岳環境を保全し、持続可能な利用を続けていくことこそが、結果的には永続的に登山者を得ることになり、地域振興に繋がると思うのだが、皆様はどのように思われますか？